

患者目線の透析医療

第 54 回九州透析研究会 会長 井関邦敏

九州人工透析研究会（The Kyushu Society for Dialysis Therapy, KSDT）の第 54 回大会を本年 12 月 11 日（日）宜野湾市の沖縄コンベンションセンターにて開催します。2013 年の第 46 回大会に引きつづき 2 回目の主催になりますが、大会長を務めるのは最後です。いつまでも若いつもりでいましたが、8 年後は 80 歳です！KSDT と私自身の関わりおよび大会のプログラムの概要について紹介したいと思います。

KSDT の第 1 回大会は 1968 年 11 月 18 日に長崎市で開催されており、奇しくも私が大学に入学した年です。同年 6 月、建設中の九州大学電算センターに米軍のファントム戦闘機が墜落し大学紛争の最盛期でした。学生時代は部活（医学部準硬式野球部）が楽しみで、卒業後も野球部先輩の多い第二内科（故尾前照雄教授）に入局しました。尾前先生は第 10 回大会（1977 年 10 月 23 日）の大会長です。

1989 年 4 月に琉球大学赴任以来、透析患者の臨床疫学的研究に取り組んでいます。沖縄透析研究（Okinawa Dialysis Study, OKIDS）の一端を OKIDS 30（1971-2000）にまとめました（Kidney Int. 2002）。KSDT の創刊号（2016 年）には「沖縄県における透析療法について 1971～2010」という題で寄稿しました。2015 年 3 月の定年退官を機に OKIDS 40 をまとめ一段落する予定でした。

しかし、西部腎臓学会（2012）、KSDT（2013）、国際血液透析学会（ISHD 2014）、国際尿毒症と尿毒素研究会（ICURT 2014）と沖縄開催が続きました。また定年後も 2016 年に国際腎栄養代謝学会（ISRNM）総会の沖縄開催。KDIGO（Kidney Disease: Improving Global Outcomes）の理事（2017-2019）関連で様々な会議・研究会、その他の用件で積極的に海外へ出かけました。結果的に OKIDS の調査が疎かになりました。

2020 年以降、コロナ禍で海外はもとより県外への出張は激減しました。替わって OKIDS 50（1971-2020）の資料収集で県内の全 74 施設を訪問しています。2001 年以降の新規導入・腎移植患者登録および OKIDS 30 登録患者（N=5246）の予後調査が目的です。最近の 20 年だけでも施設の閉院・新設・移動、担当医師の交代、電子カルテの導入など様々なことが発生しています。

KDIGO では透析療法に関するガイドライン作成のために Controversies Conference がすでに 3 回開催されています。本年 5 月、4 回目の Symptom-Based Complications in Dialysis がベルリンで開催され出席してきました。本稿のタイトルは KDIGO の透析ガイドラインの根底にあるコンセプトです。患者（家族）のニーズを理解し解決手段を講じるのは我々の役目と考えています。

特別講演を 18 歳で透析導入後 35 年の（一社）ピーパックの宿野部武志さん、医師で透析歴 21 年目のかわせみクリニックの鈴木一之先生、ISRNM の各種委員会で活躍中のテネシー大学腎臓内科の住田圭一先生そして KDIGO の創設以来活躍されている塚本雄介先生に依頼しています。OKIDS 関連の演題も予定しています。

ISRNM のホームページにある患者向けの和食紹介ビデオ（坂井敦子他：日本腎栄養代謝研究会）に「Be Active and Stylish, 粋に生きる」という標語が掲載されています。ヒトは孤独では生きていけない存在です。リモート参加が多い昨今ですが、実際に足を運ばないと分からない感覚、情報が多いのも事実です。沖縄の会場で会いましょう。

